



---

# 総合科学の基礎C 哲学・思想の基礎

第5回

担当教員 熊坂元大

---



---

# 自由とアイデンティティ

---

# 自由の種類

---

- 危害原理が保護しようとしているのは、基本的に他者からの抑圧や規制を受けずに、望み通りに振る舞う自由
- しかし快樂の質を論じるミルが想定する人間像は、単純に欲求を満たそうとする存在ではなく、むしろ欲求をコントロールして優れた個性を発揮する自由を目指すような存在
- 政治思想で問題になってきたのは主に第一の自由
- 現代では第二の自由を個人と社会との関係において、どのように位置づけるかも重要なテーマに



---

---

# バーリンの自由論

---

---

# アイザイア・バーリン (1909-1997)

---

- ユダヤ系のロマン主義研究者・哲学者
- 『自由論』1969
- 彼による二つの自由概念の整理は、その後の自由論に多大な影響を及ぼす

# 消極的自由

---

- **消極的自由**とは他人によって自分の活動が干渉されないこと
- バーリンによると、単に障害があるだけでは消極的自由の欠如を意味せず、**他者による妨害**の有無が重要
- たとえば経済的障害（十分な資金がない）のために自動車を購入できないことは、基本的には消極的自由が侵害されていることを意味しない

# 積極的自由

---

- **積極的自由**とは「自分自身の主人であること」
- 情念（passion）に惑わされた受け身の状態（passive）にある自己とは対照的に、**理性的に自律する**真の自分自身であること
- **カント**がこの種の自由の代表的思想家だが、古代ギリシャの**プラトン**にまでさかのぼる西洋哲学の伝統的理想

# バーリンの自由論

---

---

- しかし、積極的自由の概念が依拠する真の自分自身とは？
- 人びとの現状での在り方や願望を軽視して、「真のあなたは～である」と個人の自由に介入するための口実にもなりうる
- 一般に、バーリンは**消極的自由**を高く評価し、積極的自由の概念が個人への抑圧に利用されることを警戒していたと言われる



# バーリンの自由論

---

- 消極的自由同士の衝突を回避するためや、安全・正義・平等といった重要な価値を守るために、時には消極的自由が制限される必要がある
- それでも絶対に保護すべき最小限の消極的自由があり、それが守られなければ、人は自由を求めることすらできない状況に追い込まれてしまうと主張

# バーリンの自由論

---

---

- 「ミルは、自由、すなわち**強制する権利の厳格な抑制**を善と確信している。なぜなら人びとは、生活の一定の最小限度の領域のなかで、他の人びとによる干渉から自由にしておかないなら、発展することも、繁栄することも、十分に人間らしくなることもできないことを、確信しているからである」（要約）
- 「自己の確信の正当性の相対的なものであることを自覚し、しかもひるむことなくその信念を表明することこそ、文明人を野蛮人から区別する点である。これ以上のものを実践の指導とすれば、深い、そしてはるかに危険な道徳的・政治的未成熟の兆候となる」（要約）

# バーリンの自由論

---

---

- ミルは危害原則の提唱など、消極的自由の支持者という面もあるが、個性の発展に高い評価を与えたことなどを考えると、単に欲求充足ではなく、より高度な欲求を求め個性を発展させる存在としての人間観を持ち、積極的自由の支持者と言える面もある
- ミルの研究者だったバーリンも、消極的自由を絶対的に擁護するのではなく、**価値の多元性や均衡**を訴えた

# バーリンの自由論

---

---

- 「欲することを行えるという、ミルの消極的な自由の定義は役に立たない。権力者が臣民あるいは顧客を首尾よく条件づけ、彼らの本来の願望を喪失させ、彼が作り出した生活形態を受け入れさせる（内面化させる）ならば、臣民あるいは顧客を自由にすることに成功していることになる」（要約）
- パノプティコン的発想の悪用
- 行き過ぎたり誤った方向への同調（conformity）の問題

# 同調に関連する心理学実験

---

- 1962年 ミルグラム実験 (アイヒマン実験)
- 1969年 ザ・サード・ウェーブ
- 1971年 スタンフォード監獄実験

# ミルグラム実験（アイヒマン実験）

---

- ナチスでユダヤ人虐殺を指揮したアイヒマンは、特別に残酷な人間ではなく、平凡で小心な人格の持主であることが明らかに
- 普通の人間も、権威から残酷な行為を命じられれば、それに従うのかという問題意識から心理学者ミルグラムが行った実験

# ミルグラム実験 (アイヒマン実験)

---

- 実際に電気は流れないが、生徒役は絶叫・体をのけ反らせるなど迫真の演技をする
- 被験者が5度目の中止を申し出た場合、実験は中止

# ミルグラム実験 (アイヒマン実験)

---

- |        |                |   |
|--------|----------------|---|
| ■ 120V | 大声で苦痛を訴える      | スイッチ部分には、電圧の強さに関して Strong Shock, Extreme Intensity Shock, Dangerなどの表記 |
| ■ 150V | 絶叫する           |   |
| ■ 180V | 「痛くて耐えられない」と叫ぶ |   |
| ■ 270V | 金切声を挙げる        |   |
| ■ 300V | 壁を叩いて実験中止を求める  |   |
| ■ 330V | 無反応になる         |   |
| ■ 450V | 3度流したところで実験は終了 |   |



# ミルグラム実験 (アイヒマン実験)

---

- 事前予想では、最大電圧450Vまで続けるものはごくわずか (0.1%や1.2%)
- 実際は62.5%が450Vまで続けた
- 300Vの手前で実験を中止した者は皆無

# ザ・サード・ウェーブ

---

- アメリカの高校で歴史教師ロン・ジョーンズが行った試み
- 生徒たちが、ドイツの民衆がナチスに従った状況を理解しがたく感じていることを察したジョーンズは “Strength through Discipline, Strength through Community, Strength through Action, Srength through Pride” を掲げる全体主義の真似事を実際にやってみることを提案

# ザ・サード・ウェーブ

---

- 姿勢・言葉遣い・挨拶などで規律と集団性を強調
- 3日目にはクラス外の生徒にも浸透（30人→200人超）し、成績と学習意欲の大幅な向上、規律違反の密告などが見られるように
- この運動と規律に対する生徒たちの忠誠心が際立つようになり、非メンバーへの優越感や攻撃性を見せ始めたことで、手に負えなくなると判断したジョーンズは4日目の時点で運動中止を決意

# Like history in the first person

<https://www.theguardian.com/education/2008/sep/16/schoolsworldwide.film>

# スタンフォード監獄実験

---

- 大学の地下に設営された模擬刑務所で実施
- 被験者の半数を看守役、残りを受刑者役に
- リアリティを感じさせるため、囚人役は看守役の前で脱衣、シラミ駆除剤を散布。囚人服を着せ、足には鎖をつけるなど、実際の囚人以上に囚人らしくさせた

# スタンフォード監獄実験

---

---

- 次第に看守役は独自に罰則を与え初め、反抗的な囚人には監禁などの措置、
- 事態が過激化したため 2 週間の予定が 6 日で中止に
- 実験を指揮したジンバルドー自身、状況に飲まれてしまい、危険性を認識できなかったと後に説明。当時彼がつきあっていた大学院生（翌年に結婚）の異議を受けたことなどで、中止を決断



# アイデンティティ（自分らしさ）

# 選択と道徳

---

- ミルが他者の介入を嫌うのは「ある人がともかくも普通の常識と経験とをもっているならば、彼自身の生活を自分で設計する独自のやり方が最善のものである。その理由は、その設計それ自体が最善だからではなく、それが彼自身のやり方だからである」
- 相互に自由を侵犯しない（他者の選択を否定しない）という社会道徳
- さらに今日では、自分自身に誠実であること、自分らしく生きることの追求自体が善だと見なされる傾向も



# 選択と道徳

---

---

- 「正しさ」を「人それぞれ」で済ませることはできないという話はこれまでに何度もでてきたが、何に価値があると思うかは、人それぞれ自分自身で判断することであるという相対主義的態度は、現代では説得力と魅力がある
  - だが「人それぞれ」「自分らしく」と言われると、私たちはむしろどのような生き方や選択をすれば良いのか途方に暮れる
  - 自分でやりたいようにやる
  - 自分の決断に自分で責任を取る
- 周囲から切り離されて独立？

# チャールズ・テイラー (1931-)

---

- 他者からの干渉を受けず、自分のやりたいことをできれば自己実現を達成できるという考えを、個人をバラバラの原子のように認識している **アトミズム (原子論)** として批判

# 選択の価値

---

---

- ナチスに抵抗するレジスタンスに身を投じるか、年老いた母親の世話をするために留まるかという選択で悩む青年に対する返答として、フランスの哲学者サルトルは「君は自由だ。選びたまえ。つまり創りたまえ」と答える
- 選択する存在として人間が、その**選択によって価値を生み出す**という思想。この思想に非常にポジティブな印象を持つ人も少なくないのでは？
- しかし単純に選択することで価値が生まれるのだと考えてしまうと、おかしい話になるのではないかとテイラーは指摘

# 選択の価値

---

---

- 母を支えるか、レジスタンスに参加するか
- アイスを食べるかドーナッツを食べるか
  - 選択することが価値を生み出すのであれば、おやつに何を食べるかといった選択で価値が生み出されるというおかしな話に
- 困っている友人を助けるか、見捨てるか
  - 友人を助けずに見捨てることで生まれる価値？

# 選択の価値

---

---

- 目の前にある選択肢のなかに、より価値のある選択肢が存在しないのであれば、一生懸命に悩んで選択することも、その時の気分次第で適当に決めることも大差ないことに
- ということは価値は、選択の結果として生じるのではなく、選択する以前に、すでに存在しているはず

# 選択の価値

---

- ただし、価値の評価基準が自己の外部（宗教的権威や社会の伝統慣習）から与えられるだけのものだと考えてしまうと時代錯誤の保守主義に
- 近代社会においては、価値評価はあくまでも自己が行うものと考えer必要があるし、私たち自身、そのように考えているふしがある
- 価値は自己によって選択（評価）される前から存在するが、価値評価は自己が行う？
- 評価には二種類ある

# 二種類の評価

---

- **弱い評価**においては、単に欲求が満たされるか否か、どれだけ欲求が満たされるかを判断（アイス or ドーナッツ、海に遊びに行く or 山に遊びに行く）
- **強い評価**においては「高貴な/卑しい」、「誇らしい/恥ずかしい」、「優れた/劣った」といった**対照的な語彙**によって、**質的な区別**が行われる

# 二種類の評価

---

- 過食や嘔をつくことを例にとれば、弱い評価を行う者は、食べ過ぎによって健康や容姿を損なうことのマイナスと味覚・満腹感を楽しむことのプラス、嘔によって得られる利益と嘔をつくことによる不利益を比較し、どちらがより欲求を満たせるかを考慮するだけ
- それに対して強い評価は、単に欲求が満たされるかどうかではなく、評価主体にとって、自分自身がどのような人間かという**自己解釈**、アイデンティティの解釈・確認でもある
- 母親かレジスタンスか、助けるか助けないかを考えるとき、普通は利害損得だけの問題としては認識していない（はず）



# 二種類の評価

---

- 強い評価をするにあたっての判断基準やアイデンティティの概念は、**言語という自分が誕生する以前に成立しているもの**によって構成される既存の価値体系のなかで練り上げられてきたもの
- 同時に、強い評価を行い、基準や価値概念を解釈・組み換えながら自己解釈をしていくことで、**既存の社会規範に抵触することもある**

# まとめ

---

---

- 自分のアイデンティティは、外部との接触や外部からの干渉を抜きにした真空状態のなかで好き勝手に作り出すことはできない（人は言語によって思考するが、その言語は自己が誕生する以前に存在している）
- 自分という存在を社会のなかで表現するときも、**他者の理解や承認を得られる可能性**を求めて表現しなければ意味がない

# まとめ

---

---

- テイラーによると、自己は一定の社会的条件や他者との関係性のなかでのみ構成されるのであり、しかも自己は日々、再解釈されていく
- 強い評価を通じた再解釈の繰り返しは、人生の一時期（幼少期や思春期）に限定した話ではなく、自己が捨て去ることのできない**超越論的条件**
  - 超越論的 = **この世界（経験の世界）を超えた**
  - ここでは「自己」を形成するための経験が成立するうえで不可避の条件ということ

# まとめ

---

---

- 自己実現や自由な自己を否定し、外から与えられる規範の順守ばかりを要求するのは時代錯誤の保守主義
- 反対に自分で決めるのが大切、何でも人それぞれ、という具合に、判断基準を自己の内側だけに求めても、それは不可能で途方に暮れるか、自分だけで決められるという幻想に囚われることに
- 社会・他者との関わりのなかで自分というものを見つめ直し、それをまた社会や他者に理解されるような形で表現していくことが自由やアイデンティティを考えるうえで重要